

平成 26 ( 2014 ) 年度 教員活動報告書 ( 1/8 )

学部・学科	総合社会学部・総合社会学科	職名	講師	氏名	アサイ ノブコ 浅井 暢子
学歴	平成10年 3月 愛知学院大学文学部心理学科 卒業 平成11年 3月 名古屋大学教育学部研究生 修了 平成14年 3月 神戸大学大学院文学研究科（修士課程）社会学（心理）専攻 修了 平成20年 3月 神戸大学大学院文化学研究科（博士課程）社会文化専攻 修了 平成20年 9月 名古屋大学大学院環境学研究科研究生（平20.4入学） 退学				
学位	平成14年 3月 文学修士（神戸大学 修 第762号） 平成20年 3月 学術博士（神戸大学 博い 第702号）				
専門分野	社会心理学（社会的認知、対人コミュニケーション、集団間関係）				
専門資格					
所属学会	平成11年 4月 日本心理学会 日本社会心理学会 平成12年 5月 日本グループ・ダイナミックス学会 平成15年 9月 日本社会精神医学会 平成16年 6月 Society for Personality and Social Psychology 平成17年 1月 日本認知心理学会 平成23年 5月 Asian Association of Social Psychology 平成23年 8月 日本バーチャル・リアリティ学会				
受賞	平成16年 2月 日本社会心理学会 平成15年度「若手研究者奨励金」( 現・若手研究者奨励賞 ) 受賞 平成23年 9月 日本バーチャル・リアリティ学会 論文賞受賞（論文「臨場感の素朴な理解」、著者：吉田和博・寺本渉・浅井暢子・日高聡太・行場次朗・鈴木陽一） 平成24年12月 電子情報通信学会・ヒューマンコミュニケーショングループ ヒューマンコミュニケーション賞（バーチャル・リアリティ環境における他者の存在感の計測、著者：寺本渉・松浦雄斗・浅井暢子） 平成25年11月 日本社会心理学会 奨励論文賞（論文「物語の構成しやすさが刑事事件に関する判断に与える影響」 著者：浅井暢子・唐沢穰）				
担当授業科目	学 部 社会心理学概論、社会心理学研究法、消費行動の心理、コミュニケーションの心理、総合社会学とキャリア構築、総合社会入門、現代社会基礎演習、・・・、総合社会学演習、・、総合社会学実習D、卒業論文				
論文指導	論文指導（卒論：8名） 論文審査（卒論：8名）				
F D 活 動 ・ 教 育 実 績	科目名	科目カテゴリー		実施学期	履修者数
	総合社会学とキャリア構築	講義・演習・実習・実験		春・秋	約120名
	授業の概要： キャリア教育の導入となる授業である。様々な授業メニューを通じて大学生生活のみならず社会でも必要となる「聞く・書く・まとめる・議論する力」の育成を行った。				
1	教育活動の振り返り 教育活動の成果： 本年度は、昨年度に作成した「総合社会学とキャリア構築」の授業計画を共同で更新し、新たな授業メニューとして、上回生によるディベート観戦とグループワークを導入した。前者は、議論を聞く力の育成とロールモデルの提示による教育効果を、後者は意見を述べ、議論する力の育成につながることを期待して導入したものである。両メニューとも、受講生は非常にまじめに授業に参加しており、相応の教育効果があるものと考えている。また、昨年からの引き続いて行った、外部の企業の社会人講師及び本学上回生の学内講師による講演聴講や大学生生活計画書の作成は、各学生に具体的に将来を考える機会となるとともに、「聞く・書く・まとめる・議論する」といった基礎的な力の育成にもつながったと考えられる。				

平成 26 ( 2014 ) 年度 教員活動報告書 ( 2/8 )

F D 活 動 ・ 教 育 実 績	1	<p>今後の課題：</p> <p>本講義で各自が考えた大学生生活計画や今後の課題について具体的な行動へと導く方策が必要である。新年度の授業担当者が中心となり、本授業担当経験者を集めたミーティングが開催されており、授業計画の更なる更新がおこなわれている。</p>			
		科目名 総合社会学実習 D	科目カテゴリー 講義 ・ 演習 ・ <b>実習</b> ・ 実験	実施学期 春 ・ <b>秋</b>	履修者数 約 20 名
		<p>授業の概要： 本実習は、3 名の教員が共同担当で実施するものであり、学生は少人数のグループごとに心理学の基礎的な実験や調査を行ない、統計ソフトを利用したデータ分析からレポート作成に至るまで一連の研究活動過程を実体験し、心理学の研究手法に関する理解を深めていくという構成であった。実習を通じて、心理学研究において一般的に用いられる調査や実験の手法を学び、研究に必要なスキルの習得を目指した。</p>			
	2	<p>教育活動の振り返り</p> <p>教育活動の成果：</p> <p>本年度から開講された実習であり、新規に授業計画を立案した。心理学の基礎実験実習で一般的に行われる実験や調査をメニューとして取り入れ、心理学研究を実施する上で必要となる知識の育成を図った。各実習は、2コマ連続で実施し、実験・調査の実施からデータ分析までをひと続きで行うことで、研究活動の一連の流れや実験手法と分析手法の対応関係が理解しやすくなるよう配慮した。また、各研究の背景については、各教員が先行研究を丁寧に提示し、仮説の導出や実験計画の立案方法に至る論理的・科学的思考を追体験できるよう配慮した。心理学研究を実施しない学生にも、役立つ授業とするため、基礎的なパソコンソフトの使用法、論文・レポートの論理構成・書式等の規則、データの図表化の手法、データ分析法などについては、複数回の授業を割いて学生が深く学べる時間を設けた。学生は積極的に実習に参加し、楽しんでおり、データ分析に関しても基礎的な知識の習得、分析ソフトの使用法、図表化のスキルは十分に身につけている様子がうかがえた。また、各実習後のレポートからは、科学論文の形式の学びが進んでいく過程が見て取れた。</p> <p>今後の課題：</p> <p>レポート作成において同じ間違いを繰り返す例が見受けられた。これは、添削後に返却したレポートを確認しないことによるものと考えられる。他の授業にも通じることだが、復習の重要性を強調するとともに、復習（再提出）を課題とするなどの工夫が必要とも考えられる。</p>			
		<p>・ 学内外のFD関連講演会/セミナー等への参加実績 を記入してください。</p> <p>学内 2014年度第2回FD研修会「授業と評価をつなぐ為に ～ルーブリック評価入門～」に参加（平成27年3月5日）</p>			
		<p>・ 教育効果が高い、あるいは教育の一環として行われている課外活動等</p> <p>課外活動：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 正規授業時間外での学生相談（オフィスアワー等）</li> <li>・ 卒業研究のための研究室開放</li> <li>・ 演習・実習授業にかかわるデータ分析の個別指導</li> </ul> <p>正課活動：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 視覚的資料の利用およびデモンストレーションによる理解促進</li> </ul> <p>パワーポイントを使用し、図表、映像を豊富に提示することで、学生の理解を視覚的側面からも促した。また、心理現象を体験する機会を豊富に設け、知識の習得と、日常生活との関連の実感を図った。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ プレゼンテーション能力の育成</li> </ul> <p>演習形式の授業では、パワーポイントの作成技術とコツを講義した上で、全受講生にパワーポイントによるプレゼンテーション形式での課題発表を課すことで、資料作成とプレゼンテーション能力の技術育成を進めた。</p>			

平成 26 ( 2014 ) 年度 教員活動報告書 ( 3/8 )

H26 年度 研究課題	<p>1. ステレオタイプ・偏見の形成過程の検討 本質主義的しろうと理論の影響</p> <p>2. バーチャル・リアリティ環境における臨（隣）人感の検討</p>
平成 二 十六 (2014) 年度 の 研究 活動 の 概要	<p>1. 社会集団の間に遺伝子のような本質的差異があると錯覚（本質主義的信念・しろうと理論）することが集団認知に与える影響を調査データの分析と実験によって検証した。本研究からは、本質主義的信念には、自分及び内集団の類似性を強調し、自己及び内集団成員と外集団成員の差異を強調する効果があることが示唆された。今後も継続的に、本質主義的信念と集団認知、集団間行動の関係性について実証的検討を行っていく（学会報告、学会活動2, 3を参照）。</p> <p>2. 共同研究として継続して行ってきた、バーチャル・リアリティ環境（VR環境）における他者の存在感（臨（隣）人感）の測定及び規定要因の検討に本年度も取り組んだ。特に、VR環境での他者の動き情報が当該人物の存在感に与える影響を脳電位計測によって検討した（学会報告、学会活動1を参照）。</p>
平成 二 十六 (2014) 年度 の 主な 研究 成果 等	（著書）
	（論文）
	1. 「裁判員裁判における審理・評議の在り方を巡る心理学的研究の意義」、共著、平成26年10月、法と心理14巻1号（pp. 77-81）
	（学会報告、学会活動）
	1. 「VR空間での臨（隣）人感にパートナーの動き情報が与える情報」、共著、平成26年6月、日本認知心理学会第12回大会、東北大学
	2. 「Impact of Psychological Essentialism on False Consensus and False Uniqueness」、単著、平成26年7月、17th General Meeting of the European Association of Social Psychology, Amsterdam, Nederland.
	3. 「本質主義的信念が内外集団成員の性質推論に与える影響」、単著、平成26年7月、日本社会心理学会第55回大会、北海道大学
	（その他、エッセイ・翻訳・学術講演等）
	翻訳：
	1. 「青年期発達百科事典」、共訳、丸善出版、B. Bradford Brown, Mitchell J. Prinstein 編、子安増生・二宮克美監訳、青年期発達百科事典編集委員会編、（第2巻pp.264-270を担当）
	（調査活動）
	（学外研究資金による研究活動・科学研究費補助金等含）
	平成26年度-平成28年度
	科学研究費助成事業学術研究助成基金助成金（若手研究B）「本質主義的信念が集団間葛藤に影響を与えるプロセスの解明」（課題番号26780349）研究代表者
	（学内活動）
	自己点検・評価 学生サービス専門委員会委員、学生委員会委員、「人を対象とする研究」倫理審査委員会委員、オープンキャンパス委員
	（小中高との連携授業の講師）
平成 二 十六 (2014) 年度 の 社会 にお ける 活動	平成26年11月 京都府立東宇治高等学校 模擬授業、「人を見る・人から見られる（対人関係の社会心理学）」、於：同校
	（その他）
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日本社会心理学会 社会心理学研究 論文審査者「平21.8より」</li> <li>・ 日本心理学会 心理学研究 論文審査者「平23.11より」</li> <li>・ 日本グループ・ダイナミクス学会 実験社会心理学研究 論文審査者「平25.2より」</li> </ul>

平成 26 ( 2014 ) 年度 教員活動報告書 ( 4/8 )

平成二十一  
二十五  
(2009～2013)  
年度の主な研究成果等

( 著書 )

1. Discrimination, and Conflict in Japan: Ways to Social Justice and Cooperation、共編、平成24年1月、Melbourne: Transpacific Press. 共編者：大淵憲一  
( 同書籍内：Chap.8 Discrimination, and Conflict in Japan: Ways to Social Justice and Cooperation、単著 ( pp.113-148 ) )
2. 「第4章 偏見低減の理論と可能性」、単著、平成24年4月、明石書店、加賀美常美代・横田雅弘・坪井健・工藤和宏編著、『多文化社会の偏見・差別 形成のメカニズムと低減のための教育 』  
( pp.100-124 )
3. Chap.19 「Appraising gender discrimination as legitimate or illegitimate: Antecedents and consequences」、共著 ( 分担訳 ) 平成25年9月、London: Sage. M. K. Ryan & N. R. Branscombe (Eds.) Handbook of Gender and Psychology、共著者: Jetten, J., Branscombe, N., Iyer, A.

( 論文 )

1. 「臨場感の素朴な理解」、共著、平成22年3月、共著者：吉田和博・寺本渉・日高聡太・行場次朗・鈴木陽一、日本バーチャル・リアリティ学会論文誌第15巻1号 ( pp.7-16 )
2. 「「迫真性」を規定する時空間情報」、共著、平成22年9月、共著者：寺本渉・吉田和博・日高聡太・行場次朗・坂本修一・岩谷幸雄・鈴木陽一、日本バーチャル・リアリティ学会論文誌第15巻3号 ( pp.483-486 )
3. 「社会的な不平等とミクロ公正感：不公正感受性の効果」、共著、平成23年10月、共著者：川嶋伸佳・大淵憲一・熊谷智博、法と心理学会 法と心理第11巻1号 ( pp.47-57 )
4. 「多元的公正感と抗議行動：社会不変信念、社会的効力感、変革コストの影響」、共著、平成24年1月、共著者：川嶋伸佳・大淵憲一・熊谷智博、日本社会心理学会 社会心理学研究第27巻2号 ( pp.63-74 )
5. Are Japanese willing to employ a Chinese candidate with high language proficiency?、共著、平成24年8月、共著者：高久聖治・Kuniko Takeda・後藤信彦、International Journal of Psychological Studies 第4巻3号 ( pp.84-93 )
6. 「物語の構成しやすさが刑事事件に関する判断に与える影響」、共著、平成25年3月、共著者：唐沢穰、日本社会心理学会 社会心理学研究第28号3巻 ( pp.1-10 )
7. 「視聴覚コンテンツの臨場感と迫真性の規定因」、共著、平成25年3月、共同研究者：本多明生・神田敬幸・柴田寛・寺本渉・坂本修一・岩谷幸雄・行場次朗・鈴木陽一、日本バーチャル・リアリティ学会論文誌第18巻1号 ( pp.93-101 )

( 学会報告、学会活動 )

口頭発表：

1. The effects of intranational justice on the sense of international injustice.、共同、平成21年6月、共同研究者：熊谷智博・川嶋伸佳、22nd Annual International Association for Conflict Management Conference, Kyoto, Japan.
2. 「差別被害の表明に相手との関係性が与える影響」、共同、平成21年10月、共同研究者：唐沢穰、日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第56回大会合同大会、大阪大学
3. 「集団間不公正認知に与える影響」、共同、平成21年10月、共同研究者：熊谷智博・川嶋伸佳、日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第56回大会合同大会、大阪大学
4. 「臨場感の一般的理解 教育的背景の違いに基づく比較」、平成21年12月、共同研究者：吉田和博・寺本渉・日高聡太・坂本修一・行場次朗・鈴木陽一、電気情報通信学会ヒューマン情報処理研究会、東北大学
5. 「「迫真性」の追求 本物らしさを定義する時空間情報」、共同、平成22年5月、共同研究者：寺本渉・吉田和博・日高聡太・行場次朗・坂本修一・岩谷幸雄・鈴木陽一、日本認知心理学会第8回大会、西南学院大学

平成 26 ( 2014 ) 年度 教員活動報告書 ( 5/8 )

平成二十一〜二十五 (2009〜2013) 年度の主な研究成果等

( 学会報告、学会活動 つづき )

6. Psychological essentialism and consensus estimation in a minimal group situation ( シンポジウム )、単独、平成23年7月、The 9th Biennial Conference of the Asian Association of Social Psychology, Kunming, China.
  7. 「中国人の日本に対する態度 間接的接触経験と東日本大震災の影響」、共同、平成23年9月、共同研究者：大淵憲一、日本社会心理学会第52回大会、名古屋大学
  8. 「視聴覚コンテンツにおける臨場感・迫真性の規定因」、共同、平成23年9月、共同研究者：神田敬幸・本多明生・柴田寛・寺本渉・坂本修一・岩谷幸雄・行場次朗・鈴木陽一、日本バーチャル・リアリティ学会第16回大会、はこだて未来大学
  9. 「バーチャル・リアリティ環境が創出する臨(隣)人感の計測」、共同、平成24年6月、共同研究者：寺本渉・松浦雄斗、日本認知心理学会 第10回大会、岡山大学
  10. 「バーチャル・リアリティ環境における他者の存在感の計測」、共同、平成24年6月、共同研究者：寺本渉・松浦雄斗、電気情報通信学会ヒューマン情報処理研究会、室蘭工業大学
  11. 「血液型に対する本質主義的信念が合意性推測に与える影響」、単独、平成24年11月、日本社会心理学会第53回大会、筑波大学
  12. 「VR環境が創出する臨(隣)人感の事象関連電位による計測」、共同、平成25年6月、共同研究者：寺本渉・清水乃輔、日本認知心理学会第11回大会、筑波大学
  13. “Impact of Extended Contact on Chinese attitude toward Japan”、単独、平成25年8月、The 10th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology, Yogyakarta, Indonesia.
  14. 「バーチャル・リアリティ空間における臨(隣)人感」、共同、平成25年11月、共同研究者：清水乃輔・寺本渉、社会心理学会第54回大会、沖縄国際大学
  15. 「バーチャルリアリティ環境における臨(隣)人感の事象関連電位による評価」、共同、平成25年11月、共同研究者：清水乃輔・寺本渉、電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎(HCS)研究会、大阪大学
- ポスター発表：
1. 「社会と集団成員性に関する信念が差別認識に与える影響」、共同、平成21年8月、共同研究者：唐沢穰・熊谷智博・川嶋伸佳、日本心理学会第73回大会、立命館大学
  2. 「抗議行動の規定因 不公正感、社会不変信念、社会的効力感、変革コストの影響」、共同、平成21年10月、共同研究者：川嶋伸佳・熊谷智博・大淵憲一、日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第56回大会合同大会、大阪大学
  3. Influence of perceived social support on reporting discrimination、共同、平成21年12月、共同研究者：唐沢穰、The 8th Biennial Conference of the Asian Association of Social Psychology, New Delhi, India.
  4. Recognizing personal experiences of discrimination: Impact of essentialist beliefs of group differences and social structure.、共同、平成22年1月、共同研究者：唐沢穰・熊谷智博・川嶋伸佳、Society for Personality and Social Psychology 11th Annual Meeting, Las Vegas, NV.
  5. Perceptions of unfairness and social protests among Japanese: Effects of the immutability belief.、平成22年1月、共同研究者：川嶋伸佳・大淵憲一・熊谷智博、Society for Personality and Social Psychology 11th Annual Meeting, Las Vegas, NV.
  6. Causal Explanation of Discrimination: Impact of Perceived Immutability of Lay Peoples' Belief.、共同、平成22年6月、共同研究者：唐沢穰・大淵憲一、The 8th Biennial Conference of the Society for the Psychological Study of Social Issues, New Orleans, LA.
  7. 「信念の不変性に関する認識が差別認知に与える影響」、単独、平成22年9月、日本社会心理学会第51回大会、広島大学
  8. 「カテゴリーに対する本質の知覚が合意性推測に与える影響」、共同、平成22年9月、共同研究者：唐沢穰、日本心理学会第74回大会、大阪大学

平成 26 ( 2014 ) 年度 教員活動報告書 ( 6/8 )

平成二十一～二十五 (2009～2013) 年度の主な研究成果等

( 学会報告、学会活動 つづき )

10. The sense of verisimilitude has different spatial-temporal characteristics from those producing the sense of presence in the evaluation process of audiovisual contents.、共同、平成23年10月、共同研究者：神田敬幸・本多明生・柴田寛・寺本渉・坂本修一・岩谷幸雄・行場次朗・鈴木陽一、12th International Multisensory Research Forum (MRF2011), Fukuoka, Japan
11. Impact of Extended Contact on Chinese Attitude toward Japan before and after the Earthquake 2011、共同、平成24年1月、共同研究者：大淵憲一、Society for Personality and Social Psychology 13th Annual Meeting, San Diego, CA.
12. The Sense of Verisimilitude has Different Spatial-Temporal Characteristics from Those Producing The Sense of Presence in Appreciating Audio-Visual Contents、共同、平成24年7月、共同研究者：行場次郎、日高聡太、本多明生、柴田寛、寺本渉、30<sup>th</sup> International Congress of Psychology, Cape Town, South Africa
13. 「本質主義的信念と集団内尊重が外集団への態度に与える影響」、共同、平成24年9月、日本心理学会第76回大会、専修大学
14. The effect of visual information on a sense of being together in a virtual environment、共同、平成24年9月、共同研究者：寺本渉、European Conference on Visual Perception, Alghero, Italy 18. Psychological Essentialism and Consensus Estimation、単独、平成25年1月、Society for Personality and Social Psychology 14th Annual Meeting, New Orleans, LA.
15. 「本質主義的信念が性別に対する認識に与える影響」、単独、平成25年9月、日本心理学会第77回大会、北海道医療大学
16. 「民族カテゴリーに関する心理的本質主義の尺度作成」、共同、平成25年9月、共同研究者：塚本早織・唐沢穰、日本心理学会第77回大会、北海道医療大学
17. 「日本人アイデンティティの形成に関わる心理的本質主義信念の役割」、共同、平成25年11月、共同研究者：塚本早織・唐沢穰、社会心理学会第54回大会、沖縄国際大学
18. “Essentializing ethnic in-group category and its impact on identity”、平成26年2月、共同研究者：Tsukamoto, S., Karasawa, M., The 15th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology, Austin, Texas.

国際シンポジウム企画：

1. How Do People React When They Face Social Justice/Injustice?、平成21年11月、共同企画者：大淵憲一・青木俊明・熊谷智博、東北大学大学院文学研究科グローバルCOE・東北工業大学共催、東北工業大学八木山キャンパス
2. Inequality, Discrimination and Social identity. ( 司会兼務 ) 平成22年1月、共同企画者：熊谷智博、東北大学大学院文学研究科グローバルCOE主催、東北大学川内南キャンパス
3. 「社会階層と逸脱 青少年の非行と社会関係の病理」、平成22年1月、共同企画者：大淵憲一・戴伸峰、東北大学大学院文学研究科グローバルCOE・台湾青少年犯罪抑制学会共催、東北大学川内南キャンパス
4. Social Justice, Social Identity, and Intergroup Conflict. ( 司会兼務 ) 平成22年3月、共同企画者：熊谷智博、東北大学大学院文学研究科グローバルCOE主催、東北大学川内南キャンパス
5. Intergroup Conflict and Social Identity: Impact of History, Continuity and Stability of Group、平成22年11月、共同企画者：引地博之・松山淳、東北大学大学院文学研究科グローバルCOE主催、東北大学川内南キャンパス
6. Social Inequality and Justification of It ( 司会兼務 ) 平成22年12月、共同企画者：山本雄大・川嶋佳伸、東北大学大学院文学研究科グローバルCOE主催、東北大学東京分室

( その他、エッセイ・翻訳・学術講演等 )

翻訳：

1. 『APA心理学大辞典』、共訳、培風館、Gary R. VandenBos監修、繁榎算男・四本裕子監訳、1056p ( 社会心理学の専門用語を主に担当 )

平成 26 ( 2014 ) 年度 教員活動報告書 ( 7/8 )

平成二十一～二十五 (2009～2013) 年度の主な研究成果等

( その他、エッセイ・翻訳・学術講演等 つづき )

学術講演：

1. Coping Strategies for Discrimination: The Role of Causal Explanation ( 講演 )、単独、平成21年11月、東北大学大学院文学研究科グローバルCOE『社会階層と不平等教育研究拠点』・東北工業大学共催 国際シンポジウム How Do People React When They Face Social Justice/ Injustice?、東北工業大学八木山キャンパス
2. Determinants and consequences of causal explanation of discrimination、単独、平成22年3月、The 4th International Symposium on Frontiers of Sociological Inquiries by Young Scholars in Asia, Miyagi, Japan.
3. Recognizing Personal Experiences of Discrimination: Impact of Perceived Immutability of Social barriers ( 講演 )、単独、平成22年11月、東北大学大学院文学研究科グローバルCOE『社会階層と不平等教育研究拠点』 国際シンポジウム“Intergroup Conflict and Social Identity: Impact of History, Continuity and Stability of Group”、東北大学
4. 「視聴覚コンテンツの臨場感と迫真性」( 招待講演 ) 共同、平成23年5月、共同研究者：鈴木陽一・寺本渉・吉田和博・日高聡太・坂本修一・岩谷幸雄・行場次朗、第1回マルチメディア情報ハイディング・エンリッチメント研究会、国立情報学研究所
5. 「偏見の形成と低減 社会心理学からの理論的検証 」( 招待講演 ) 単独、平成23年6月、異文化教育学会第32回大会公開シンポジウム「偏見の形成メカニズムと低減のための教育 誰一人切り捨てられない社会の構築に向けて 」、一橋大学
6. 指定討論者、平成24年3月、「紛争解決と公正：日中文化比較」、東北大学大学院文学研究科グローバルCOE『社会階層と不平等教育研究拠点』・熊本大学大学院社会文化科学研究科 交渉紛争解決・組織経営専門職コース共催 ワークショップ、法政大学
7. 「日本人と中国人の間の関係構築：自国民との対人関係が与える影響の検討」、単独、平成25年2月、東北大学大学院文学研究科グローバルCOE『社会階層と不平等教育研究拠点』公正研究部門主催 特別ワークショップ「社会的関係と公正 組織、文化の視点から」、法政大学
8. 「事件に関する物語の構築と法的判断」( 講演 )、単独、平成25年10月、法と心理学会第14回大会ワークショップ 「裁判員裁判における審理・評議の在り方を巡る心理学的研究の意義」、九州大学

( 調査活動 )

- ・ 平成23年、中国、韓国、台湾の大学生を対象に「日本に対する意識調査」および「アジア人の価値観に関する社会調査」を実施した。回答者数は合わせて2500人程度。
- ・ 平成23年、日本国内の9区市町村に住む5400名を対象に「日本人の『社会・人生・自然』に関する意識調査」と題した社会調査を実施。

( 学外研究資金による研究活動・科学研究費補助金等含 )

平成21年度-平成22年度

東北大学大学院文学研究科グローバルCOEプログラム「社会階層と不平等教育研究拠点」COE 研究員

平成23年度-平成24年度

東北大学大学院文学研究科グローバルCOEプログラム「社会階層と不平等教育研究拠点」連携研究員

( 学内活動 )

平成24年 4月 図書館委員会委員「平26.3まで」

学生相談室運営委員会委員「平26.3まで」

平成25年 4月 自己点検・評価 学生サービス専門委員会委員「現在に至る」

学生委員会委員「現在に至る」

「人を対象とする研究」倫理審査委員会委員「現在に至る」

平成 26 ( 2014 ) 年度 教員活動報告書 ( 8/8 )

平成二十一 ～二十五 (2009～2013) 年度の 社会における活動	( 小中高との連携授業の講師 )	
	平成24年 6月	京都文教高等学校ALP 「「人を見る・人から見られる」対人関係の社会心理学」 於：同校
	平成25年 1月	京都文教高等学校ALP 「「人を見る・人から見られる」対人関係の社会心理学」 於：同校
	( その他 )	
	平成21年 8月	日本社会心理学会 社会心理学研究 論文審査者「現在に至る」
	平成23年 4月	聖和学園短期大学非常勤講師 ( 心理学 ) 「平23.9まで」
	平成23年 5月	1. 東北大学非常勤講師 ( 心理学 ) 「平23.9まで」
		2. 東北工業大学非常勤講師 ( 経営コミュニケーションセミナー 、経営コミュニケーション研修A ) 「平23.9まで」
	平成23年11月	日本心理学会 心理学研究 論文審査者「現在に至る」
	平成25年 2月	日本グループ・ダイナミックス学会 実験社会心理学研究 論文審査者「現在に至る」